

なぜ私は推理小説を読まないのか（2）

法医学分野 教授 舟山真人

さて、前回から基礎修練で来ている学生との会話は続きます。

学1) 「でも、死亡時刻が謎解きの推理小説ってそうそうあるもんでもないでしょう。」

教授) 「もちろん、そのほかにも読まない理由があるから。」

学2) 「えっ、まだあるんですか？」

教授) 「前回のタイトルが（1）だったのを覚えているかい？ ということはその続きがあるということじゃないか。」

学3) 「なんだか回りくどいなあ…」

教授) 「年をとるとそうなるのさ。」

ということでここからが本題。なぜわたしは推理小説を読まないのか “その2”。

ヨーロッパの有名な推理小説にはよく毒殺が出てきます。アガサ・クリスティも毒殺ネタが好みらしく、彼女の小説の多くに毒が使用されています。彼女は小説家になる前に薬剤師として働いていたことで、毒物の知識を得ていたのでしょう。第2作目でトリックの奇抜さで有名となった「アクロイド殺し」でも毒物が使用されています。ヨーロッパの歴史は毒殺とともにあり、そもそもギリシア神話の中にも毒の話題が多数出てきます。1例としてヘラクレスが退治した猛毒を持つヒドラ、しかしその無敵のヘラクレスも策略のためヒドラの毒を浴び死ぬこととなります。現実の世界でも賢者ソクラテスは自らドクニンジンの杯をあおったことは有名な話です。



その後も毒の話題は中世ヨーロッパをはじめ、宮廷貴族、特に女性が暗殺に使うものとしてしばしば顔を出します。19世紀になると、毒の知識は一般大衆にも広がり、逆に毒は使いにくくなっていきます。わが国の歴史ではあまり毒使いの話は出てきませんが、かの伊達政宗は母による毒殺未遂に巻き込まれたようですし、そもそもお殿様のお膳をあらかじめ毒味役が食していたことから、殿様は毒というものの存在を認識し、それによる暗殺を恐れていたのでしょう。

「毒」と言っても数多くの種類があります。鉱物や人工物、植物や動物が作るもの。そして服用直後に重大な障害がでるものから、少しずつ飲ませ時間をかけて死にいたるものまで。推理小説では大部分が即効性の毒が使用されており、有名どころとして青酸とヒ素、そしてトリカブトやチョウセンアサガオ、ジギタリス、ペラドンナ、ドクニンジンなどに含まれているアルカロイド系薬毒物です。いずれもクリスティの小説の中に出てきます。問題はどのようにしてその死体が毒物による死だと分かり、しかも具体的に毒の名を挙げられるのでしょうか。前者の答えは簡単です。大抵、被害者は衆人の前で何かを飲んだ直後に症状が現れ、その死に方は苦しみに満ちています。実際に心中目的でトリカ

ブトを服用し、助かった人によれば、根を擦ったものを食して間もなく「口やのどが痺れ」「喉が焼け付くようになり」「ひどい吐き気や嘔吐が起こり」とても耐えることができなくなり救急車を呼んだとのこと。ある人が飲食中に突然、このような症状を訴えて倒れれば、周りにはだれでも毒を疑うでしょう。



☠ トリカブト(烏兜)

仮に最初は犯罪がスルーしても、犯人の周りで次々と人が死ぬことで発覚するのもお決まりのパターン。実はわが国で有名なトリカブト事件も3人の犠牲者がでましたが、2人目までは病死として扱われ、さすがに3人目となりその異様さに気がされました。もっとも最初に気づいたのは捜査機関ではなく、保険会社で、その支払い拒否に関する民事裁判が、マスコミに注目されたことからです。最初の死体で薬物分析を行っていれば、2体目、3体目の事件は防げたかもしれず、わが国の中毒分析体制がいかに遅れているか、を示しています。

そして第2のポイントである探偵はどうして短時間でその毒が何かまでわかったのか？これは最初のポイントにも関係します。もちろん毒を調べるのはその時代の専門家ですが、現代でも毒物の分析は、それを正確に行おうとすればするほど、たいそう高額な機器と熟練したオペレーターが必要です。特に苦労するのはアルカロイド系薬毒物で、極めて微量で死を引き起こします。小説中の探偵はその症状から予測し、次に入手先を見つけだし、その毒物にたどり着きます。でもその成分を確実に分析したわけではありません。

仮にアルカロイド系薬毒物で死亡し死体で見つかった場合、きわめて厄介です。解剖上、なにも特徴的な所見はありません。現在でも血液などから短時間で簡単にアルカロイドを検出する方法はありません。繰り返しになりますが、私からみれば何故犯人は皆がみている前で事件を起こすのでしょうか。こっそり実行すればよいのに。多分、そうすれば“完全”犯罪となり、小説にもならないからでしょう（そもそもどうしてその場にたまたまポアロやミス・マーブルがいるのか、という不自然な点を除いても）。

われわれの教室には稼働中の精密機器が複数台あります。薬毒物の種類によって、分析に適した機器を使い分けています。ただ最初から薬毒物の候補が挙げられる場合はともかく、なんだかわからないが兎にも角にも薬毒物関与の有無を調べたいとなると、機器にそれぞれの薬物の特徴を覚え込ませなければなりません。即ち、予めそれぞれの薬物の特徴を機器に登録しておき、調べたい試料がその特徴と一致した場合に、血液中にその薬毒物が含まれている可能性が高いと判断します。薬物の特徴を登録したソフトをライブラリと言います。我々の所有するライブラリには、数百もの薬物が含まれ、この中にはトリカブトに含まれる主要なアルカロイドも登録されています。10年前には全くお手上げであったアルカロイドの分析も、今では十分可能です。よって犯人がこっそり実行したトリカブト殺人も、たまたまそこにミス・マーブルがいなくとも、たちどころに見破ってしまうでしょう。



環境・食品など幅広い分野で微量分析技術として利用：
有毒ガス（青酸、硫化水素）、シンナー、乱用薬物（覚せい
剤、麻薬、大麻）など



GC-MS に比較して薬毒物スクリーニングの適用範囲が広い：
医薬品（睡眠薬、精神安定剤）、農薬など

今、われわれは最新の精密分析機器を利用し、体内の薬毒物を“超”短時間で結果がだせるような研究を行っております。分析は2つのステップをとります。まず1) 血液から薬毒物成分を抽出する作業、そして2) そこから具体的な薬物を検出する作業、からなります。通常のプロセスでは1) が1時間ほど、2) は数時間ほどかかります。まず1) に関し、当方の講師が5分で抽出できるプロセスを報告しました。もともとは農薬分析で用いられている方法を法医学的試料に応用したわけですが、多数の薬毒物の抽出にも有用であることが分かり、すでに多くの法医学教室で実用化しています。現在の研究は2) です。従来数時間かかる検出工程を10分以内で行うのが目標です。そして現段階で複数の薬物と農薬が10分以内に同定可能という結果を出しています。もともとはがん細胞か否かの診断を手術現場で迅速に行うことを目指した企業が薬毒物検査にも応用できないかということで、薬毒物分析に長けたわれわれの教室に共同研究を依頼したものです。法医実務では確実性が大事なので多少とも分析時間がかかってもよいのですが、この研究の最終目的の一つは救急現場での迅速診断とそれによる救命向上です。あるテレビドラマで法医は「手遅れの医学」と呼ばれていましたが、われわれの教室はこういった形で臨床医学研究にも参画しているのです。

ということで毒殺に関して言えば昔の推理小説の分析技術はすでに過去の遺物であり、故に最新科学捜査を扱ったCSIドラマに人気があるのでしょうか。もちろん毒物がものの10分で同定されても、それで真犯人がわかるわけでもありません。ただ小説よりも奇なり、の現実社会で、これまで見逃されていた毒殺事例が精密機器の登場で発覚、そこからおどろおどろしいストーリーが始まり、マスコミを賑わす、といったところでしょうか。